

庭野平和財団

第20回庭野平和賞受賞記念講演

2003年5月8日(木)

イラク、戦争と平和

プリシラ エルワーズィー博士

オックスフォード・リサーチ・グループ理事

この度庭野平和賞を頂戴いたしますことは大きな名誉でございます。世界が恐ろしい戦争にゆれ動く時、平和のために命をかける人達の名において、お受けさせていただきとう存じます。できますことなら、本日与えられた全ての時間を費やして、現在の深刻な平和問題のいくつかをお話したいと願っておりますが、先ず最初にイラクの危機からわれわれが何を学べるか、問い掛けることが肝要かと存じます。後に触れますように、われわれを勇気づけることもいくつかありますが、先ずわれわれが今注目し、叡知をもって行動する必要のある四つの困難な問題について、概略を申し述べます。

1. 戦争以外の行動の選択肢がまだ残されていたにもかかわらず戦争が開始された。

米・英の政権は、イラクに対し軍事介入を行う以外の選択肢を真剣に検討しようとしませんでした。ほんの一例をあげますと、5人のアメリカ人教会指導者がトニー・ブレア首相とジョージ・ブッシュ大統領に対し、戦争と不行為との間にある“第三の道”を提案しました。計画には、国連の委任を受けた多国籍軍の存在を背景に査察を強化しつつ強制的にイラクの軍縮を実行すること、人道に反する罪を犯したサダム・フセインを追訴すること、イラク国民に対し国連とNGOを通じて大量の人道援助を即時実行すること、2005年までの実行計画にもとづきパレスチナ国家とイスラエルの安全を保障し、中近東の平和を樹立するための“ロード・マップ”を実行する決意表明、が含まれていました。

私は本年1月にバグダッドを訪問して閣僚達と会談し、危機を乗り越えるための基本案を持ち帰り、ワシントンとロンドンで政権の内情に通ずる人々と討議した結果、詳細提案¹を提示しました。この提案はトニー・ブレア首相に届けられ、その後英国のマスメディアへ、さらに米国に届けられました。しかしその内容を公表したのは英国のガーディアンとキューカーのみでした。様々な国において同僚達が危機の期間を通じて十分に練り上げられた非暴力的な提案を行ないましたが、政治指導者達との非公開の話し合いでも、マスメディアとの関係においても何ら進展は見られませんでした。オプションとして残されたのは現在すでに存在する方式、すなわち査察官の役割を拡張すること及び国連決議を採択することで、これらに主な焦点が当てられました。それはあたかも、2002年の秋に米英軍が展開を開始した直後にただ一つのオプションに執着し、開かれた思考を停止してしまったかのようでした。戦争というシナリオは長期計画として策定されていたのです。

2. イラク問題は“21世紀アメリカプロジェクト”²の文脈においてのみ明確に理解しうる。

1990年代半ばに、最初に読んだ時には、単なるネオ・コン（新保守主義者）の地政学的誇大妄想に過ぎないと思えました。いわば陰謀理論を信ずるには私はあまりに国際安全保障の領域で長く仕事をし過ぎていたのです。しかしこれは一理論ではなく、一つの事実であり、まさしく今起こりつつあるのです。それはユーラシアのすべての主要な政治の中心が一つ残らず、アメリカとの関係が他のいかなる政治の中心との関係より重要だとみなすよう保障するというグローバルな戦略概念なのです。いいかえれば、すべての政治の中心が一本一本車輪のスポークのようにアメリカという車軸に取り付けられてアメリカの最高裁治権が保障されるのです。

このプロジェクトを最初に構想した人々、ーディック・チェニー、ドナルド・ラムズフェルド、ポール・ウォルフオヴィッツ、ジョン・ボルトンなどは、米国政府の主要な権力ある地位を占めています。この概念は米国の多国籍企業との密接な関係の上に運用され、米軍の卓越した軍事力に依存しています。かくして、米軍の様々なホームページに記述されている“全面的優位性”の力の発動となるのです。米国宇宙軍司令部のホームページには“米国の権益と投資を保護するための軍事力の行使において空間と宇宙空間を支配する。紛争の全領域にわたる戦争遂行能力に宇宙軍を統合する。”と書かれています。³

¹ *Costed Proposal for Iraq*, www.oxfordresearchgroup.org.uk を参照。

² www.newamericancentury.org

この政策はドイツからロシアにいたる西ヨーロッパの勢力圏、あるいは中東に対する西ヨーロッパの勢力圏を阻止しようとする努力を生み出す結果となり、したがって米国はEUの安全保障あるいは防衛政策は何であれ敵意を持つことになったのです。この政策はまた、東はモルドバからコーカサスとカスピ海地方を通じて中国国境に至るエネルギー産出国のベルト地帯を支配することを必要とします。その意図は米軍基地の環で中国をとりかこみ“将来の使用に備える”ことです。膨大な中国市場の自由化が終盤目標とされているからです。現在この地域には13の既存の基地、5つの未確認の基地、ならびに6つの潜在的な基地があることを地図⁴により示すことができます。ブッシュ大統領はこの拡張主義的戦略を全面的に取り入れたようです。ブッシュ大統領にとってイラクの政権交代は最終目標ではなく、始まりに過ぎないのです。

しかしながら、米国内には懸念を表明する重要な声が上がっています。ロバート・バード上院議員は最長老かつ最長任期の議員ですが、本年三月十九日に次のように述べています。“われわれは、意見を異にする人々と一緒に道理を尽くして考えるかわりに、相手に服従を要求しあるいは非難をあびせるぞと脅迫する。サダム・フセインを孤立させるかわりに、われわれは我々自身を孤立させてしまったようだ。われわれは、殆どの人が理解せず多くの人が恐れる先制攻撃という新しい主義を宣言している。テロに対する戦いで疑わしいと考えるなら、米国には世界のいかなる地域でも火ぶたを開く権利があるのだという。われわれは、この権利はいかなる国際機関による承認も不必要だと主張する。その結果世界は、今までよりはるかに危険な場所になったのだ。”

これらの計画の規模を世界の残りの部分という文脈で理解するには、費用が一体いくらかかるかを知る必要があります。ブッシュ大統領は議会に対し、イラクに対する軍事行動の初期費用として

620億ドル、復興に80億ドルを予算化するよう要請しました。国防総省は当初950億ドルを要求し、イラク戦争は大統領が要請した額の2倍かかる可能性がある」と指摘しました。連邦準備理事会のローレンス・メーヤー元理事長は、この支出は毎年750億ドルを10年にわたり支払いつづける頭金に過ぎないかも知れないと示唆しています。すなわちアメリカ合衆国は10年間に7500億ドルを必要とするかも知れないプロジェクトをもくろんでいるのです。

³ www.spacecom.mil

⁴ *A Never-Ending War?* by Paul Rogers and Scilla Elworthy, Oxford Research Group, March 2002 参照。

われわれはこのコストを別の方策で国際安全保障を構築するコストと比較しなければなりません。2000年に世界の指導者達が行った推定によると、アフリカの人々の健康と福祉のレベルを西側の標準まで引き上げるには、毎年250億ドルから350億ドルが必要です。⁵ ユネスコの推定では、もしわれわれが10年間にわたり毎年70億ドルを支出するなら、世界のすべての子供達を教育することができます。⁶ 毎年90億ドルを支出するなら、世界のすべての人達に衛生的な上下水を提供できます。⁷ 世界中でHIVとエイズにより毎日5500人の人々が死亡しています。これは黒死病⁸による死亡者数を上回り、すでにアフリカでは1200万人の子供達が孤児となっています。⁹ コフィ・アナン国連事務総長はエイズの疫病対策に年間100億ドルを支出しようと呼びかけています。¹⁰

3. 強力な体制を確立した残忍な独裁者の政権を軍事力を行使せずにどうすれば倒せるか、説得力のある実例を今後作ることが期待される。

イラク国民はサダム・フセインにより22年間にわたり拷問、処刑、失踪、裁判手続きのない拘留、クルド人とシーア派の民族浄化という恐怖にさらされてきました。西側政府は、反対勢力への支援と武器提供によりフセイン政権を内部崩壊させようとしたましたが、これらのグループは政権を相手とするかわりに相互に争う結果になったのです。

非軍事的な方策を体系的に実行する試みはされませんでした。西側政府と西側メディアの十分な支援があれば、東ヨーロッパでの“ビロード革命”と1980年代のフィリピンでの人民蜂起から学んだ教訓を生かして、市民による“ピープルパワー”の抵抗運動は可能だったはずですが。そのためには衛星テレビ放送局とラジオ放送局を設置する資金援助を行ってサダム・フセインのメディア支配を打ち破り、イラクの反体制勢力に抵抗運動を活性化する方法を与えることが含まれます。

Mark Henry Porter, *The Observer*, 30th March 2003, p8

Mark UNESCO *Facts and Figures 2000*

Mark United Nations Development Programme, Human Development Report 1998 <http://hdr.undp.org/reports>

Mark Henry Porter, *The Observer*, 30th March 2003, p8

Mark World Bank, <http://www.worldbank.org/afr/aids/>

Mark UNAIDS, <http://www.unaids.org/>

大量破壊兵器のみを査察するのではなく、国連はもっと多人数の査察官を送り市民の権利改革をモニターすることができたはずですが。すなわちイラク政府がすでに開始したとっている複数政党制の導入ならびに市民としての権利及び政治的権利を制限する法律の廃止を継続して改革を力づけ

ることです。この取り組みを行えば、経済制裁及び石油食料交換計画は廃止でき、一般のイラク人が十分な食料を手に入れ、インフラの構築、特に医療サービスを構築することができたに違いありません。国外に離散した何十万人という専門職のイラク人が安全を保証されてイラクに帰国できた可能性があり、彼らの安全が脅かされた場合にはサダム・フセインを逮捕し直ちに石油収入を没収するという条約を締結する可能性もあったのです。

イラクの石油の採掘および輸出に関する商業的な取り決めは、選挙による政府が樹立された時には公開入札制度に復帰したはずです。同時に石油企業との交渉は国連の監督のもとにおかれ、西側が石油資源を支配するためイラクに介入したのではないことを実証するのです。

イラクとの取り決めは米国の軍事基地をイラク国内に置くことを含まず、そのかわりイラク国内に残存する化学兵器・生物学的兵器を最終的に廃棄すること、国連の査察官が駐留すること、明白な国連決議により大量破壊兵器の開発ならびに使用の再開を禁止し、禁止の効力を保障することなどを当然含みます。これは中東に大量破壊兵器の存在しない地域を確立するための序曲となるでしょう。

4. 第四の考察は最後の考察と密接にかかわっています。それはすなわち、政治家やメディアも含めほとんどの人達が、いまだに「非暴力のわざと力」についてのことば（手段）を持っていない、ということです。

今では、われわれは皆、絶滅に瀕した生物種、飢餓、リサイクルについて知っているにもかかわらず、平和のため現実は何ができるかを知らうとする一般の人々にとって、同様な戦略は存在しません。全てがいまだにややあいまいで、望ましいが実際的ではないと見なされています。

明らかに、われわれが最初になすべきことは、「非暴力が何であり、かつ何ではないか」を検討することです。戦闘では、あなたは他者を殺害しないと命を失うリスクがあります；非暴力では、あなたは他者が一人たりとも殺されないために（必要なら）命を賭けるのです。厳しい訓練を受け深い信念がなければ非暴力の実行はできません。非暴力が暴力的、残酷、あるいは怒れる人々に対して持つ効果は、同じ相手に対して一層の暴力をふるう効果より大きいのです。非暴力は相手の心の深いレベルに働きかけるのです。ガンジーが生み出し、英国人をインドから追放することに完全な成功をおさめた力は、サチャグラハ（非暴力）にほかなりません。非暴力の信奉者は、自発的な暴力の使用を基本的に否定し、思いやりと勇気をもってする決意におきかえるのです。ガンジー自身は次のように述べています：

“非暴力はこのような場合、理性を抑圧せず、慣性から解放し、理性を偏見、憎悪その他のいやしい品性を支配する主権として確立するのです。非暴力を逆説的にいいかえるなら、理性を隷属させず、自由たらしめざるを得ないのが非暴力なのです。”¹¹

この力をマーチン・ルーサー・キングは教えかつ用いて、ディープサウスと呼ばれるアメリカ南部の人種差別撤廃にむけて巨大な影響をおよぼしたのです。これこそ、アンサン・スーチー女史が、

率いたデモ隊に発砲せよと命じられたビルマ兵の機関銃に向かって武器を持たずにまっすぐ歩いて行った力なのです。この力をネルソン・マンデラは27年間の投獄生活で身に付け、出獄した時に南アの内戦を防止するために使ったのです。そしてこの力が鉄のカーテンを引きずりおろし、「ビロードの革命」（内戦を伴わない革命）を実現した、陰の力なのです。

カルフォルニア大学の平和と紛争研究プログラムの創設者であるマイケル・ネーグラー教授の推定によると、世界人口の1／3近くが不満や抗議の原因となる状況を正すために何らかの形の非暴力を実行しています。

“これが「ピープルパワー」の概念である。この考えによれば、ふるいたつ民衆の力は国家の権力に勝る。なぜなら国家は国民の同意と協力に依存するからである。市民が蜂起する時、フィリピンでの2度の悪評をこうむった蜂起がわれわれの記憶に新しいが、国家にはそれを抑圧する力がない。しかし「ピープルパワー」は氷山の一角に過ぎない。真の非暴力は、私の理解では、個人の力である。それはたった一人の人間のもつ力なのである。”¹²

¹¹ M.K. Gandhi の引用：出典 *The Search for a Non Violent Future*, Michael Nagler, Berkeley Hills Books, 2001 p 65

それでは一体個人としての人間は何をするのでしょうか？

カオイミー・バターリーは24才のアイルランド人女性です。彼女は2001年12月にパレスチナに行きました。そしてパレスチナ人の家を破壊しようとするイスラエル軍の戦車に向かって歩いて行ったのです。彼女は市民を守るために銃火の中に飛び込みます。子供達に発砲しようとする兵士達を止めようとして立ち向かい、自分の左ももを射たれたのです。

1984年の保守党大会の爆弾事件で父親を殺されて15年後、ジョー・ベリーは爆弾をしかけたパトリック・マギーと会う決心をしました。彼女には相手と仲直りをする勇気があったのです。今では二人は北アイルランド紛争で苦しむ人々のかけはしとして一緒に働いています。

比叡山の山田恵諦師は天台座主でした。1969年に世界の一角を照らす光の運動を日本で組織し、人々が互いに信頼しあい尊敬しあうことのできる社会を作ろうと献身的な努力をされました。

歌手であるピーター・ガブリエルは1992年に「ウィットネス」（証人）という組織を設立しました。ビデオ映像がことばでは伝えることのできない事件の臨場感と影響力を持つことを認識した彼は、紛争の第一線にいる住民達にビデオカメラを手渡していったのです。北アイルランドでのデモ行進に対する警察の残虐行為の録画は警察の方針変更を余儀なくさせました。

「ウィットネス」が撮影したビデオはユーゴスラビアの戦争犯罪法廷で証拠として採用されました。¹³

たとえすべての人がこれほど注目すべき業績を自分一人では達成できなくても、そのような人達の支えとなることが出来ます。そのためにわれわれは「ピース・ダイレクト」（平和のための直接行動）という運動を設立し、紛争の第一線で非暴力的に殺戮を防止したり荒廃した社会を復興させるために働く支援グループを結びつける役割を果たしています。¹⁴

¹² Russell Schoch *A Conversation with Michael Nagler* mnagler@igc.org

¹³ 出典： *War Prevention Works, 50 stories of people resolving conflict* Oxford Research Group, 2001.

¹⁴ website www.peacedirect.orgを参照

非暴力の潮流

自ら非暴力を実践しあるいは支えることにより、われわれはより早く、より強力な潮の流れと共に動いているのです。しずかな潮流であるにもかかわらず、前に述べたような恐怖の上に立つ軍事介入の力よりも一層早く強力な流れだと信じます。

この一年間にわたりわれわれは全世界で人々が立上り、戦争の妥当性そのものを疑問視するのを見守ってきました。巨大でグローバルな公衆の話し合いにより、戦争には正当性があるか、ないかと世界が問い掛けているのです。今全世界がこの致命的な重要性を持つ歴史的な対話によってあらゆる立場や見解に耳をかたむけ、戦争をするべきかするべきでないかを問いただしているのです。

本年3月、元国連事務次長で現在コスタリカの平和大学名誉総長であるロバート・ミュラー博士は、現在の戦争と平和の世界情勢について彼ならではの積極的な評価を与え、強く聴衆の心を打ちました。

“私が今ここにいることは大きな名誉であります。”と彼は述べました。“このような歴史における奇跡的な瞬間に生きていられることは名誉なことです。”

ミュラー博士はさらに次のように述べています。“世界史上、今ほどグローバルで、目に見える、公衆の、実行可能な、公開の対話と会話が戦争の合法性そのものについて実行されたことはありません。さらに対話は、戦争の影響、コスト、平和的な代替選択肢、今まで考慮されなかった交渉の方法、宣戦布告を行なう真の意図は何かなどについて行なわれています。

ミュラー博士は、これらすべてのことが、正にその目的で1949年に設立された国連安保理の文脈でとらえられていると述べています。博士は、半世紀以上の時を経て、国連の真の機能が実現したと指摘しています。

さて、私自身にとりまして、今ここにいられることは名誉なことです。それは庭野平和財団が与えてくださったまことに偉大な名誉であります。私はこの名誉を、多くの場合無名で讃美されることなく、自分たちが知り会うことすらないかもしれない人々のために命を賭け、命を捧げる非武装の男女の英雄達の名において、お受けしたく存じます。今ここで、われわれが彼等の勇気を知り、彼等の力を知っていることを証言いたします。最後に、ダライ・ラマのことばを引用させていただきます。

す

“多くの宗教の中心的教義は、あなた自身が経験したいと願うこと、すなわち施しを他者に与えることです。自らの人生と全世界であなたは何を経験したいと願っているのか、心をすまして見ましよう。そして、あなたを源としてそれを受け取ることのできる他者がいないかを探してください。

もしあなたが平和を経験したいなら他者に平和を与えなさい。

もしあなたが安全であると知りたいなら、他者が安全であると知るように行動なさい。

もしあなたが一見理解不能なことがらをよりよく理解したいと願うなら、他者がよりよく理解できるよう助けなさい。

もしあなたが自らの悲しみや怒りを癒したいと願うなら、他者の悲しみや怒りを癒そうと努めなさい。

これらの他者は今あなたの導きの手を、助けを、勇気を、強さを、理解を、今この時の保障を待ち望んでいるのです。何にもましてあなたの愛をもとめているのです。”